

第9分科会

各務原市立那加中学校



所在地 〒504-0022 各務原市那加東亜町48
校長 加藤 勝祥
生徒数 640名(21学級)
連絡先 TEL 058-389-2281 FAX 058-389-2282
E-mail nakachu@he.mirai.ne.jp
URL <http://www.mirai.ne/~nakachu/>

【研究主題】

運動ができる喜びを味わう体育授業

～バレーボールにおける指導過程の究明を通して～



1 研究の概要

(1) 研究主題

各務原市の中学校では、生徒が、小学校で経験した「運動の楽しさや喜び」を味わう体育授業を基盤とし、そこで培われた資質や能力をさらに高め、知識や技能を確実に身に付けさせ、運動を豊かに実践できるように研究を推進してきた。また、運動を豊かに実践するために、仲間と共に運動を行うことそのものを楽しんだり喜んだりする資質を高めていくことも大切にしてきた。

岐阜県では、運動の特性に基づき教材を分析し、運動習熟の過程を「様相・姿」「技術構造」でとらえ、指導計画・指導過程に反映させてきている。「様相・姿」とは、運動が上達していく過程の各段階のことであり、「技術構造」とは、技術を構成する要素を上位（中核）技術と下位（周辺）技術として分析したものである。それらを生徒の発達の段階や実態に合わせて系統的にとらえて指導にあたってきた。また、仲間と共に主体的に運動に取り組む態度の育成を小集団での学習の中で役割や規範、仲間づくりの点からとらえ、その在り方を明らかにしてきた。さらに、



つまずきに応じた場を設定したり練習方法を工夫したりして、課題を把握・分析し、生徒が思考・判断しながら技能を習得し、「運動ができる喜び」を味わえるよう指導してきた。

こうした歩みも踏まえ、第9分科会では、保健体育科における「技能」「態度」「知識、思考・判断」の指導内容を確実に身に付けさせるためには、運動習熟のための指導の在り方に研究の焦点をあてる必要があると考え、大会の柱となる5つの研究内容のうち次の2つに絞り、研究を進めることにした。

① 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

② 技能の向上に結び付く思考・判断を高める方法の工夫

運動の習熟過程を、運動が上達していく（うまくなっていく）“みちすじ”ととらえた。その“みちすじ”は大まかに「できない」－（それらしく）「できる」－「うまくできる」－「力強くできる」という段階をたどると考えた。運動が上達していくみちすじを確実にとらえ、それぞれの段階におけるつまずきを解消する手立てを明確にし、できる喜びを味わわせたいと考え、研究主題を「運動ができる喜びを味わう体育授業」と設定した。

本実践では、ネット型球技であるバレーボールを研究対象種目とした。生徒がバレーボールの楽しさを味わうとともに主体的に学習に取り組む指導過程の究明を通して、達成感や成就感を味わうことができるよう、副主題を「～バレーボールにおける指導過程の究明を通して～」とした。

(2) 研究の仮説

バレーボールの学習におけるゲームの様相（段階）をとらえるとともに、上達のみちすじに即した指導方法を明らかにして指導すれば、生徒は運動ができる喜びを味わうことができる。

(3) 研究内容

① 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

ア 基本的指導過程の究明

- ② 技能の向上に結び付く思考・判断を高める方法の工夫
ア 1時間の基本となる指導過程の明確化
イ 1時間の学習, 指導における工夫

2 公開授業

(1) 第1学年 球技「バレーボール」 授業者 : 中奥 憲吾 教諭

単元目標を「相手からのボールを確実にレシーブし、カバーの動きを使ってボールをつなぎ、3本以内でねらって返すゲームができる」と設定し、本時は、「相手からのボールをレシーブし、カバーの動きを使ってボールをつなぐことができる」ことを目標とした。

全体会では、既習事項である「ボールの落下地点に素早く入り、真上に上げられるようにする動き」に加え、カバーの動きとして「ボールを打つ人以外がどのタイミングでどのように動くか」を映像や仲間の動きから、具体的に示して理解できるようにした。

グループ練習では、お互いの動きぶりを見合い、投げ入れサーブからボールを打つ人以外の周りの仲間の動きを確認した。ボールを打つ人を囲む動きのタイミングや、体の向き、いつ・どこに動けばよいかをグループでアドバイスし合い取り組むことができた。

練習ゲームでは、前半練習で取り組んだことを生かし、勝つために声を掛け合い、精一杯動く生徒の姿が見られた。



(2) 第3学年 球技「バレーボール」 授業者 : 後藤 拓 教諭

単元目標を「セッターを中心とした6人のコンビネーションを高め、三段で攻めたり、守ったりするゲームができる。」とした。

本時は、「球すじを整えて、力強くスパイクで攻めることができる」ことを目標とし、全体会にて、前時までの仲間の映像や示範の動きから具体的に提示し、スパイカーの下がるタイミングや位置取り、しっかりとミートすることを課題の動きとした。また、一本目から準備することや、トスに合わせてタイミングよくジャンプすることなども確かめることができた。さらに、レシーブトススパイクの3つの動作についておさえ、関係のリズムをつかませた。



グループ練習では、チャンスボールからの三段攻撃練習を行い、リーダー・POを中心に互いに声を掛け合い、課題解決に向けて積極的に取り組む姿が見られた。

練習ゲームでは、スパイクが得点につながった本数を記録し、グループ反省会・全体反省会で、ゲーム記録を参考に課題達成度を確認した。「いつ」「どこに動いて」「何をするのか」を明確にして、力強くスパイクをし、懸命に活動する生徒の姿が見られた。

3 研究協議

- (1) 提案 司会者 : 御宿 智幸 教諭 (岐阜県中学校体育研究会)
発表者 : 下屋 幸比古 教諭 (岐阜県中学校体育研究会)

<本校の主張・提案>

ア 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

イ 技能の向上に結び付く思考・判断を高める方法の工夫

<本校の実践>

ア できるようになる楽しさを味わう体育授業～球技「バレーボール」の学習を通して～

(2) 協議内容 (□…質問・意見・感想)

※ 回答は、授業者(中奥教諭, 後藤教諭)

- マイクを使った授業はいつも行っているのか。仲間を大切にしている姿がたくさんあった。仲間との関わりが高まっている。集団面で大切にしていることや研究していることがあれば教えていただきたい。

A マイクについては、参観者の方に、いろいろな言葉が

けを聞いていただけのように使用した。日頃は使用していない。導入の部分での言葉の精選を心がけ、どんな言葉を投げかけることが子供たちの頭に残るのかを考えてきた。

また、全体を見られる立ち位置を心がけている。集団面については、本校には、「那加中人権宣言」というものがあり、日頃から意識をして指導している。本単元では、1時間目から仲間を励ましたり支えたりする声かけが多くあった。体育の授業だけでなく日頃の指導、学級経営などから全職員で支え合いながら授業を作っていくことができている。

- 教師の思いが子供たちにも伝わっており、コミュニケーションがとれていると感じた。「球すじを整える」「力強いスパイク」といったことをどのように伝えているのか。

A 球すじを整えることについては、これまでの学習の中で力強いスパイクへの憧れをもたせながら、1本目、2本目の高くふわっとしたパス、余裕を持った攻めにするためのセッターの高く上げるオーバーパスを指導してきた。また、本時の課題である力強いスパイクのためにはミート、特に肘を伸ばし、頭をかかのようにして肘を高く上げて打つというコツを意識させた。ただ、スパイクの大切な動きであるジャンプについては、まだまだ足りない部分があるが、特に本時素早く下がり、準備をするということを大切にしたい。

- 3年生では、セッターを固定しているようだったが、どのようなルールにしているのか。変則的なチェンジをするチームもあったが…。1年生で大切にしていた「カバーの動き」が、3年生では、少し弱かったように感じられるがどうか。

A セッターについては、グループ編製の段階からセッ

ターのできそうな生徒を2人入れるようにチーム作りを行った。実際には、ツーセッターのような形で取り組んでいる。ローテーションの中で、セッターの位置だけでのスイッチは指導している。グループの実態によっては、生徒の動き方から変則的な動きが見られたが、基本的にはすべてローテーションの中でスイッチを行う指導している。1年生のようなカバーの動きが、3年生で見られなかったことについて、現在の3年生も1年生時には経験している。技能の向上とともに、1本目がセッターに上がるようになってきており、カバーの動きをする意識はあるが、次の段階の動きへと意識が高まっており、カバーの動きが薄れてきたと感じている。



□ 男女共修で授業をやっているのに、那加中学校の男子だけの学習に新鮮さを感じた。岐阜県は別修が基本か。女子のバレーボールの出口とはどんな姿を目指しているのか。

A 岐阜県の場合は、男女の体力差、思考的なものの違いを考慮し、男女別修でより質の高い体育学習を求めてきているのだと思う。本時取り上げたスパイクについても、男子の方が力強く打つことができるわけだが、グループの作戦や求める動きについても別修でこそ学べる内容があると考え。女子のバレーボール学習では、質の違いはあるが、三段攻撃でブロックをつけ、ブロックカバーの動きを身に付けることまで高めたいと考えている。本校は、3年間指導を行っているのに、そうした段階まで高める思いで実践している。

□ 思考・判断力の育成について、1年生では記録を付けていたが、3年生では、審判・簡易記録で1年生の記録とは違っていた。また、思考・判断力の育成を考えると、ゲームを見合うことが重要だと考えるが、指導の中で、あえて位置付けていないのか。

A 運動量の確保、そして動くことでこそ目指す動きを身に付けさせたいと考えている。本校は、コートが3面とれるという恵まれた条件であることから、そのメリットを生かすため、3年生では、セルフジャッジで行った。また、映像記録などで、動きを見つめさせ、思考・判断力の向上を図っている。また、グループ会や教え合いで技能的なアドバイス、練習の補助を積極的に行わせ、意識を高めている。また、1年生で行ったゲーム記録は、グループ会に活用し、接球数を確認させたりプレーを想起させたりして、思考判断につないでいる。人数や場の実態に応じて効果的な指導を考えたい。



□ ゲームを中心に進めていくときに、課題設定に苦労することがあるが、生徒の様相から課題を設定しているのか、単元計画上の課題設定を大切にしているのかどちらか。

A 生徒の見せる様相から上達のストーリーを考えている。1年生でいくと、1本目を高く上げようとしているが、「うまくいかない→カバーすればいい」という生徒の意識でつないでいる。単元の最初で、目指す姿を提示してスタートする。生徒の実態に応じて、順序立てて進めている。それを基本的な指導過程として考えている。

□ オーバーハンドパスの技能が高い。1年生、3年生ともにオーバーハンドパスに特化して練習していると感じた。低いボールに対しては、アンダーハンドパスも必要になってくるのではないかと。3年生のスパイクを返す段階になると、もう少しアンダーハンドパスの練習も必要なのではないか。

A 中学校で学ぶバレーボールは、オーバーハンドパスでプレーする方が安定する。生徒に問いかけても、やや恐怖感はあるもののオーバーハンドパスの方が確実に返すことができるという意識があり、オーバーハンドパス中心の練習とした。カバーの動きを生かすためにも、ふわっと高く上げることを大切に、つなぐ楽しさを実感させた。つき合いの段階では、円陣パスや投げ入れパスでは、つなぐことに重きを置いてオーバーハンドパスを中心に指導している。3年生では、導入段階ではエンドラインからのアンダーハンドサーブを進めたが、アンダーハンドレシーブが安定せず様相が停滞した。そこで、サーブはアタックラインからのアンダーハンドサーブとし、オーバーハンドパスのレシーブでつなぎを安定させ、



三段攻撃率の向上を図った。三本で整えて力強いスパイクを打つことに重点をおいて取り組んだ成果が、本時の姿である。力強くスパイクに対して、アンダーレシーブは有効であるが、全体的には、オーバーハンドパス中心の指導でよいと考えている。

(3) 指導講評 指導助言 : 岐阜大学教育学部教授 杉森 弘幸 先生

若い先生が一生懸命取り組み、さわやかな授業を提供してくださったことに感謝したい。那加中学校は男子バレーボール部が休部で、経験者はなし、授業づくりにおいて、バレーボール部がいるのといないのでは決定的に違いがあり、そういった実態の中で、指導援助を考えられた授業であった。



今日の授業について、体育教師の専門性、生徒にどのように関わっていくのかという視点で話したい。

体育授業においては、今と昔の子供たちの現状を踏まえて実践を進めていく必要がある。

球技は、ベースボール型・ネット型・ゴール型に分けられるが、まずベースボール型では、空間的な視点、時間的な視点、認知的な視点が必要である。それぞれが分離しており技術性が高い。ゴール型では、空間的に相手を見ながら、ボールをもってプレーをする。例えば、ドリブルやパスを使ってゲームを展開する。ボールを保持して行うため、ボールを持っていない人に共通する空間的認知能力が必要である。

本日の授業内容であるネット型は、空間的には整理されている。自分たちのコートでしっかりとボールを操作することが必要になる。特徴的なことは、時間的なプレッシャーがあるということ。しっかり操作できれば意図的な攻撃ができる。1年生では投げ入れられたボールをキャッチしてポジションを確認する練習があった。時間的なプレッシャーを軽減し、うまくつないでボールを返し合う楽しさを実感させることができた。バレーボールでは、1回しかボールに触ることができず、技術的には極めて高い技術が必要とされる。生徒にとっては非常に難しい運動である。運動経験が少ない生徒はボール操作が苦手であり、ボールに合わせて動くことにも課題がある。実際には、ボールの落下点に入って構えてとらえる。時間的なプレッシャーを考えたときにボールを高く上げることの必要性がでてくる。それが良い準備をすることにつながってくる。バレーボールの技術的な課題、また時間的なプレッシャーをどのように生徒に伝えていくか。そこがバレーボール指導の難しさである。

中奥教諭の1年生の授業では、「相手からボールをレシーブし、カバーの動きを使ってボールをつなぐことができる」という本時の課題に対して、生徒たちの生き生きとした前向きな表情があった。集中して身体を向けて声をかける。自在ボールの使用で、時間的なプレッシャーの軽減を行った。1つ目のプレー、2つ目のプレーと段階的にとらえさせ、プレーの先取りを意識化する。1つ目で動く、囲む、タイミングよく声をかける。2つ目でも同様に…。本時の授業では、生徒たちが「できた」という実感をもつことができた。さらにゲームでは、勝ち負けにこだわらせ、「負け」も味わわせることで次への課題をもたせ、意欲化を図っていく。授業



の中で大切にしていきたいことである。

後藤教諭の3年生の授業では、「球すじを整えて、力強いスパイクで攻めることができる」という課題で、1年生からつながったバレーボール指導の中学校の出口を考えたときに、どこまでをねらうのが重要になる。本時では、チャンスボールを入れてスパイク練習した。映像を見せて連動をイメージさせることもできた。実際に1-5隊形でチャンスボールからのスパイクの練習を行い実感させた。考えていき

たいこととして「三段攻撃」は、何をもって三段攻撃というのかということ。また、力強いスパイクというものの定義をこれからの研究でもはっきりとさせていくことが必要だと考える。

単元を通して、また1時間を通して、意図的・計画的に授業をつくっていく必要がある。男子と女子の違いもあるが、女子の難しさとして、ボールに関わらないという実態も考えていきたい。運動経験が足りないのは、言われたことをやるのはできる。一緒に、こうやってやるんだと教えることが大切である。能動的、そして積極的に取り組むことができるようにするために、先生がもっと一緒に入ってやれるとよい。運動経験の足りない生徒がいれば、教師が一緒に入り、プレーしてやりたい。

運動経験が足りない場合は、どこに意識をもっていくのか。それは、なるべくゲームに近い形で行うこと。自分の動きをつくっていくことは自分の意識をつくっていくこと。実際のゲームでは、状況に応じて動くことが大切である。ボール操作もしながら周りの状況をつかむことは大変難しく、主観的な要素をもってそれをできるようにしてやりたい。

4 成果と課題

(1) 成果

本分科会では、授業提供校の那加中学校を中心としながら、市内8校の各務原市保健体育部会全員で研究実践を積み重ねてきた。今までの経験や知識を多数の教員で交流することで、目の前の生徒に身に付けさせたい技能、思考判断をより明確にすることができた。

- 研究実践を通して、学年の発達の段階を踏まえたバレーボールにおける指導過程（上達のみならず、課題や練習方法、つまずきや手だて等）を明らかにすることができた。
- ゲームの様相をとらえ、それに応じた指導方法を明らかにし指導すれば、生徒は次の様相に進むとともに、達成感や成就感を味わうことができる。
- 生徒の思考・判断を高めるためには、その学習経験の状況を踏まえて、[教え→導き→引き出す]などその段階に応じて具体的ヒントであったりアドバイスを用意したりすることが効果的である。研究会後には、参観者から、次のような感想が届けられた。
- 子供たちが汗をかきながら生き生きと、一生懸命取り組む姿が素晴らしかった。運動が得意な生徒は自分がやりたいという気持ちだけではなく、グループの仲間が上達するように関わる姿が良かった。日頃の授業から集団学習を大切にされ、生徒同士の深い関わりを育まれていることがよく分かった。
- あいさつがとても元気よく、練習場面、試合中も互いに声をかけ合いながら雰囲気よく感動に取り組んでおり、見ている方も一緒にやりたいと思えるような授業だった。どちらの授業も、先生方の生徒に対する助言や気付きの視点をもたせる声かけがあり、生徒もやる気をもって活動できていた。

(2) 課題

今回の研究成果を生かし、他の運動種目においても学年の発達の段階に応じた指導過程の在り方を究明し、「技能」「態度」「知識、思考・判断」の指導内容の位置付け方について、研究実践を通して深めていきたい。

